

# 土佐のわらべ

第412号《第434回（2016. 2. 18） 子どもの本の読書会記録》参加者6人・文書参加4人

## 『古事記物語』

福永 武彦／作

岩波書店

初めて『古事記物語』を読みました。前半は馴染みのある物語ばかりで楽しめましたが、後半は読むのがなかなか大変でした。カタカナで表記された登場人物たちの名前が覚えにくかったり、一人の人物が複数の名前を持っていたりしたのも、読みが進まなかった理由です。出来事がさらっと書かれているので歴史の教科書を読んでいるような気持ちになり、どのように楽しんでよいのか分からず、ここ2年間の読書会の中で一番苦戦した本でした。ですから今回の読書会では、みなさんの感想を聞くことを楽しみにしていました。

物語の前半に登場する人物やあらすじは、以前から知っていたという方が多数でしたが、知ったきっかけが三者三様であったのは面白かったです。子どものころに日本の昔話として絵本や紙芝居で知った、という人もいれば、春祭りで披露されるお神楽で知ったという人もいました。自分とはいうと、昔見たアニメか何かに出てきた「ヤマタノオロチ」という悪役で、古事記の登場人物の名前を初めて知ったような気がします。

いろいろな感想の中で一番びったりきた意見は、「古事記は、日本におけるいろいろな創作物の源流となっているのではないか」という一言でした。「物語がシンプルなうえに、共通のイメージ（登場人物や話の構造など）をみんなが持っているため、創作の題材として使いやすい」、と。

この意見は本当にその通りで、今回の読書会では参加者の方々が自然と、古事記をモチーフとしたお気に入りの作品を紹介し合い、会の始まる前からは想像できないほど盛り上がりました。

「作家たちの想像力を刺激する古事記はすごい」という感想や、「現代の物語に限らず、昔話にも古事記に登場する物語によく似たお話がたくさんある」との意見も聞くことができ、古事記をルーツとして日本にはいろいろな物語が広がっていったんだということが感じられました。

また、日本だけでなく世界各地でも、古事記の話と同じような構造の神話や伝説が発生しているというのは、不思議ですがとても面白く感じられます。ミクロネシアには、殺された体から作物ができたという昔話があるそうですし、海の向こうに常世の国があるという話は、アイルランドの神話にも見られるそうです。

今回通して読むことで、今まで断片的にしか知らなかった物語を、一つの流れとして掴むことができました。また、会の中でたくさんの感想や意見を聞くことができたので、古事記の楽しみ方が少し分かったような気がします。色々教えてくださいました皆様、ありがとうございました。

(H.S)